令和7(2025)年度アクティブ・ラーニングプログラム一覧(秋学期開始)

2025年9月22日
教務課

活動学期:秋学期

No.	プログラム名	カテゴリ	プログラムの概要	単位認定基準	担当教員	認定単位数	対象・募集人数	プログラムへの参加方法
9	VR・AR・AI	ICT	3DCG技術やイラスト、動画などの応用技術としてのVR(バーチャルリアリティ)やAR(オーグメンティドリアリティ)の作成に向けて知識をつけることと、AIとの連携などでユーザーインターフェースのプログラムを作成する。 Unityなどのゲームエンジンを使えると作成が楽になる。 ICTの基盤技術としてサーバー構築を行う。	【認定基準】 1)週1回の集合時に学習意欲をもって参加していた。 2)事前・事後学修を含み、与えられたテーマをこなし、成果を出した。 3)本講義の目的を理解し、到達目標に至ることができた。 上記の内容を含め、十分な成果が認められた場合、単位を認定する。 〇評価配分 週1回の集合時にテーマに沿って設定した自分の課題を(事前事後学修成果を含めて)よくこなしている(30%)、積極的発言など(20%)、最終成果への貢献(50%)	新西　誠人 菅沼　睦 出原　至道 他ICT関連教員数名	2	【対象】 1～4年次 【募集人数】 設定しない(最大30名程度が理想) サーバー構築は10名程度まで	説明会を9月25日(木)4限、211教室にて行うので参加すること。もしくは、第2講までに、新西まで連絡し、説明を受けること。
10	統計検定2級	ICT	本プログラムでは，一般財団法人である統計室保証推進協会が認定している「統計検定」の中の1つの資格である「統計検定2級」の資格を取得すべく，その基礎固めとなる統計的内容について座学で学修するプログラムである。想定する受講生は，統計検定2級取得者を目指す者であるが,座学型のALであるため，資格合格の可否にかかわらず，15回の講義、2回の途中段階でのレポート((1)カイ二乗検定、(2)線形モデル)および最終レポートにより単位を認定する予定である。 説明会を9月23日(祝・火)1限目および昼休み(12:15-12:45)223教室にて行う(どちらかの参加でかまわない)。 テキストは「日本統計学会公式認定　統計検定　2級　公式問題集(CBT対応版)」を用いる。 なお，下記，第2講～第13講までの予定については，前後することがある。	【認定基準】 毎回課題を提出すること(授業(前後を含む)2時間×15回，および上記の事前・事後学修3時間×15回)，加えて最終課題を指定日までに提出すること。最終課題については，第14回目頃までにアナウンスする。	久保田　貴文	2	【対象】 2～4年次 【募集人数】 最大20名	説明会を9月23日(祝・火)1限目および同日昼休(12:15-12:45)に、どちらも223教室において行う。どちらかに参加すること。もしくは、第2講までに直接久保田まで連絡し、説明を受けること。
11	囲碁を通じた社会人基礎力養成	社会人基礎力	背景と目的: 　囲碁は、古い歴史を持つ日本の伝統文化であり、かつ、その独自のルールが国際的に評価されている頭脳スポーツである。囲碁や将棋などの完全情報の対局ゲームでは、プレーヤは、(1)一定時間内に自分自身の判断によって着手を決定しなければならず、(2)着手の結果についてランダム要素の介入する余地なく自ら責任を取る必要があり、(3)対局を通じてルールを守ること・他者を尊重する精神を学ぶことができる。囲碁では、特に、盤面が他の対局型ゲームに比べて広いため、長期的な計画力・バランス感覚・大局観を養成することができる。本プログラムでは、実際に囲碁を学ぶことを通じて、「考え抜く力」「決断力」「計画力」「柔軟性」「主体性」「規律性」を養うことを目的とする。 実施概要: 　本プログラムは、囲碁の未経験者・初心者を対象とする。15回の講義を通じて、13路盤で対局できるようになることを目標とする。前半の7回は、ルールの理解と終局の確認までを指導し、後半では、「石の形」「生死」などを学びながら、9路盤・13路盤での対局を行う。また、後半では、翌週の講義までにオンラインなどで対局を行い、解説を希望する棋譜を持参すること。(履修人数　最大20名)	【認定基準】 ・12 回以上講義に参加すること ・講義外で 15 局以上のオンライン対局を行い、25 級相当以上の棋力を有すること ・最終レポートを提出し、合格すること	下井　直毅 出原　至道 杉田　文章	2	【対象】 1～4年次 【募集人数】 最大20名	9月23日(火)3限に223教室で説明会を開催する。 なお、2回目以降は金曜2限に221教室で実施する。 受講希望者は必ず出席すること。 低学年・成績優秀者を優先して選抜する。
12	世代継承プログラム_秋	地域研究	本学は2017年度～2019年度にかけて研究ブランディング採択事業として「大都市郊外型高齢化に立ち向かう実践的研究」に取り組んできた。採択期間終了後においても、地域社会に寄与する大学として継続してジェロントロジー(高齢化社会工学)に取り組んでいる。その活動の一環として「地域住民のコミュニティの場を大学が提供する」とともに「多摩地域に数多く存在する既に退職した日本の高度経済成長を牽引した高齢者の活力を、学生世代の若者に継承する」ことを行う。 　本プログラムでは、プログラムに参加する学生が、本学が開講する公開講座(リレー講座)を聴講する高齢者の交流の場(サロン)を設けるとともに、その交流の中に学生自身が参加して高齢者からの活力の継承を受ける。また、高齢者のこれまでの人生の軌跡や遺したい想いデータとして蓄積する。 　本プログラムは2018年度より継続していたが、グループによる近距離での会話を前提とするため、2020年度以降はコロナ感染防止の観点から開催を見送っていた。これを2025年度より復活させるものである。	【認定基準】 1)リレー講座後(木曜5時限)にT-Studio2階(予定)で実施する交流サロンの運営に参画し、高齢者と交流する 2)高齢者との交流、特定高齢者の軌跡や想いを記録する 上記の内容に、十分な成果が認められた場合、単位を認定する。	小林　英夫	2	【対象】 1～4年次 【募集人数】 20名程度	参加希望者は下記の事前説明会に参加し、参加申請書を提出する。 希望者多数の場合は、参加申請書とこれまでの学修状況により選抜を行い、9月30日までに結果を通知する。 事前説明会に不参加の者は原則として履修を認めない。 事前説明会:9月25日(木)5時限(16時20分～)　@T-Studio 2階 尚、実際の活動は10月2日(木)より開始する。
13	高難度中国語文等の輪読II	中国語能力向上・中国理解	中国語能力検定には世界規模のものとして漢語水平考試(中国語発音はHanyu Shuiping Kaoshi、その頭文字をとりHSKと呼称)が存在する。このHSK試験は中華人民共和国の教育部(日本の文部科学省に相当)の管下にある中華人民共和国国家漢語国際推広領導小組弁公室(略称は国家漢弁)が実施しており、世界最大規模を誇る。このうち最高難度である6級(最低難度は1級)長文読解問題は特に難問として知られる。 　そこで本プログラムでは、中国のパワーエリートむけ経済誌の時事解説記事や古典中国語(いわゆる漢文)の長文読解を輪読形式で実施していく。輪読とは、学生一人一人が輪転して読解し解釈を発表した上で互いに解釈の相違を討論する形式のアクティブ・ラーニングである。今次プログラム参加学生は、課題の高難度中国語文について事前予習として日本語翻訳および注釈付与を試み、当日に予習成果の発表を行い、参加学生による相互討論を経た上で、列席の教員が最終添削を行う。 　なお、中国語を母語とする学生の参加希望もあろう。彼らについてはプログラムの趣旨にもとづき選抜を行うものとする。なおもし参加となった場合、彼らには日本語を母語とする学生に対し、課題の文章の内容について平明な日本語で解説をし、日本語能力を向上させるとともに文化交流を濃化させたい。なお彼ら留学生も古典中国語(いわゆる漢文)を読み慣れておらず、たとえば後述『瞭望新聞週刊』2015年4月6日の記事「奇葩祭品」の「但徴諸寧波等地LV」につき「諸」を「之於」と読み替える古い文法を誤植と誤解してしまう。すなわち、本プログラムは中国語母語話者に対するさらなる中国語能力向上も含意しうる。 　さて、具体的な輪読予定テキストは、現代の経済誌として『瞭望新聞週刊』(中国国営通信社である新華通訊社の系列にあたる)、また古典中国語として清代(1616年～1912年)の『点石斎画報』(1884年から1898年まで毎週刊行)、『清稗類抄』(1917年出版)といったものを予定する。なお伝統中国から続く中国文化の理解を目指しつつ、並行して繁体字(香港台湾で使用)、簡体字(大陸で使用)、常用漢字(日本で使用)への習熟を企図する。なお具体的な参加学生像として高度中国語能力獲得希望者を想定する。また秋学期の輪読IIでも引き続き清代を扱う予定である。その途次には前述のように中国人留学生の助力を積極的に仰ぐ(主には日本語能力がおしなべて高い水準にある広東財経大学からの交換留学生を想定)。 　なお本プログラムではさらに中国理解を増進し幅広く長文読解試験に対応していきたい。そこでCiNii「NII学術情報ナビゲータ」(Citation Information by National Institute of Informatics)の利用方法を習得したうえで関係中国論文につき教員および参加学生が論評しHSKさらには卒業研究制作に資するものとする。古典中国語読解と関係論文講読の割合は学生の状況をみて適宜変更するものとする。	【認定基準】 非常に読解困難な中国語文について、世界最大規模の中中辞典(中国語を中国語で解説する辞典)や関連する資料を利用し読解を試みる。2021年秋学期・2022年度・2023年度では、学生は5行につき10時間(600分)ほどの予習を必要とした。発表につき60分、また事前学修につき600分、事後学修につき30分、合計で690分の学修を15回にわたって実施し、合計10350分(172時間30分)の学修を目指す。テキストの難度は教員が自負するものではあるが、事前学修は学生の個人的な努力によるものなので、正課1回90分から換算し2単位を付与したい。	水盛　涼一 バートル	2	【対象】 2～4年次 【募集人数】 5名程度	参加希望者は事前に水盛(mizumori-r@tama.ac.jp)へご連絡ください。毎週火曜日4限時間帯に実施予定で、初回はC棟3階教育サポート室(図書館むかい)でガイダンスを行う予定です。もともと少人数を予定しており、参加者の希望および担当講師時間割の勘案によって時間帯を変更する可能性があります。

2025年9月22日
教務課

令和7(2025)年度アクティブ・ラーニングプログラム一覧(秋学期開始)

活動学期:秋学期

No.	プログラム名	カテゴリ	プログラムの概要	単位認定基準	担当教員	認定単位数	対象・募集人数	プログラムへの参加方法
14	社会工学研究会インターゼミ Ⅱ (秋学期)	その他	社会工学研究会(インターゼミ)とは、本学寺島実郎学長が直接指導にあたる研究会であり、学部(経営情報学部・グローバルスタディーズ学部)および大学院(経営情報学研究科)の垣根を越えたゼミ活動をおこなう。なおインターゼミは2年次以上学生につき履修可能科目として設定されているが、学生の成長という要素にかんがみ、特別に1年次学生へのアクティブラーニング実践科目として履修を可能とする(2021年以前に回帰するものである)。 さて、インターゼミは九段サテライトキャンパス(〒102-0073 東京都千代田区九段北1-9-17寺島文庫ビル3階)で土曜日5限時間帯(16時20分から17時50分、ただし15時45分ごろの参集が望まれる)に開催される。このうち前半の第1部では参加学生による情報共有と学長による週間講話が、後半の第2部では上記「担当教員」のほかグローバルスタディーズ学部教員が加わり学生とともに多摩学、アジアダイナミズム、サービスエンターテインメント、デジタルトランスフォーメーションの各班で研究活動を行う。 なお第2部は各班学生の主体的な学修の成果発表の場であり、およそ先行研究や各種資料による文献研究(literature study)、また現地に出向いて対象に直接ふれる田野調査(field work)といった課外活動に基づく。参加学生のうち学部生はおよそ20歳前後となるが、大学院生はMBA取得を目指す社会人が主体である。 さて、この会名となる社会工学social engineeringの語は古く、キリスト者アープは1911年に『社会工学者』なる書籍を公刊している(Edwin Lee EARP, The Social Engineer, New York: Eaton & Mains, 1911.)。その語義は多用であるが、経営から国際関係まで様々な社会問題を学際的手法で分析解明し、社会設計や政策立案といった方面からの解決を図るものであろうか。ひるがえって寺島学長は現在の日本について「社会工学的な発想で仕組みを再設計しない限り、ある種の雇用不安の中で社会的な荒廃が進行していくのではないか」と指摘している(「知識創造時代の経済・社会・政治」富士通システム総研経済研究所『FRI Review』第4巻第3号、2000年7月)。本プログラムでは分析と提案という作業につき学生みずからが当事者となって社会工学的思考法を身に着けることを目標とする。もちろんその際には学長をはじめとする多数の教員が参与し、学生の成長へ助力していく。	【認定基準】 文献研究と田野調査はともに困難な内容である。少なくとも水盛の参加した2017年以来、学生は学期末の担当部分の論文作成について10時間(600分)ほどの予習を必要とした。その他に上記の班内各週発表でそれぞれ事前・課内・事後の3種に90分ずつの学修を見込む。ここで合計3300分(55時間)の学修を目指す。インターゼミの難度は教員が自負するものではあるが、事前学修は学生の個人的な努力によるものなので、正課1回90分から換算し2単位を付与したい。	金 美徳 久保田 貴文 越田 辰宏 杉田 文章 髙橋 彰 パートル 平石 隆司 水盛 涼一 宮本 純至	2	【対象】 1年次 【募集人数】 5名程度	社会工学研究会(インターゼミ)は学年暦に従い実施される。基本的に春学期(4月開講)からの継続が望ましいが、秋学期(9月開講)を排除するものではない。ただ、内容や開催地(九段サテライトキャンパス)の特性上、事前に多摩キャンパスでの面談が必要となる。9月30日(火)午前中までにアクティブラーニングプログラム担当者である水盛(mizumori-r@tama.ac.jp)へ連絡いただければ、昼休みや放課後にC棟3階の教育サポート室(図書館むかい)で対応できるだろう。
15	自動運転と社会	産官学民連携	自動運転の技術面、事業面、国内外の実証実験、実際の自動運転の試乗体験を踏まえ、高齢化社会・ドライバー不足・交通事故減少のために自動運転技術・サービスが社会においてどのように実装されるべきかを考察するALプログラムである。 技術面に関しては、教員では補えない部分について、東京大学生産技術研究所などの招待講義・意見交換を行う。また、BOLDLY株式会社およびセネック株式会社、さらにはアイサンテクノロジー株式会社、そして大田区と連携し、羽田イノベーションシティにおける自動運転の実証実験(自動運転レベル4を実装)等に参画し、試乗体験や意見交換を行う。座学の回では各回で前回内容の小テストを実施する。実証実験参加実施日は、講義4回分を充当する。最終的に、実証実験参加後に、経営情報学部の立場から、ビジネスモデルとしての提言(報告書)を企業/行政に提出する。 アイサンテクノロジー株式会社と一緒に国土交通省の補助金事業に参加し、社会的受容性に関する取り組みを行う場合もある。 【本ALプログラムのフロー】 ①座学→②専門家と意見交換→③自動運転試乗/現場と意見交換→④ビジネス的(事業構想的)な提言を企業/行政に提出する ①→②および③→④でインプットとアウトプットの経験を積み、学修して研究したことを企業/行政に提言として公表することで、社会に良い変革を与えることを目標とする。 ※なお、ゲストの都合により授業順序を入れ替えることがある。また、実証実験参加については、通常の時限とは別に行う可能性がある。なお、ゲストは予告なく変更になる場合がある。	【認定基準】 ・36時間～45時間で2単位	樋笠 尭士	2	【対象】 2～4年次 【募集人数】 30～40名程度	参加したい学生は秋学期前に掲示されるポスターなどの掲示物や、案内するT-NEXTのアンケートに回答して、申し込みをすること。 【9/8更新】 毎週火曜の3時限にT-Studioで実施する。初回は9月30日(火)3時限、同じくT-Studioで行う。
16	日本語能力試験(N1)対策講座	日本語能力向上	日本語能力試験N1を受験する学部留学生対象 ・2025年12月7日に開催される日本語能力試験N1の合格を目標とする ・報告書の書き方を練習する	【認定基準】 ・遅刻や早退により授業を受けない時間が30分以上になる場合は欠席として扱う。 ・授業に出席していない回数が、7回以上の場合、単位認定不可とする。 ・遅刻あるいは早退した場合は、2回で欠席扱いとなる。 ※「授業の出席・欠席・高潔に関するルール(経営情報学部:2024年度版)に準拠する	金安 晃裕	2	【対象】 ・2024年度以降入学の留学生 ・第2回日本語能力試験を受験予定の留学生 【募集人数】 30名	テキストを各自購入(学内セブンイレブンで販売)し、9月19日(金)1限に、211教室に必ず来ること。
17	日本語能力試験(N2)対策講座	日本語能力向上	日本語能力試験N2を受験する学部留学生対象 2025年12月7日に開催される日本語能力試験の合格を目標とする 報告書の書き方を練習する	【認定基準】 ・遅刻や早退により授業を受けない時間が30分以上になる場合は欠席として扱う。 ・授業に出席していない回数が、7回以上の場合、単位認定不可とする。 ・遅刻あるいは早退した場合は、2回で欠席扱いとなる。 ※「授業の出席・欠席・高潔に関するルール(経営情報学部:2024年度版)に準拠する	小林 裕子	2	【対象】 ・2024年度以降入学の留学生 ・第2回日本語能力試験を受験予定の留学生 【募集人数】 30名	テキストを各自購入(学内セブンイレブンで販売)し、9月19日(金)1限に、212教室に必ず来ること。
18	日本理解※留学生用プログラム	日本研究	日本は外国人にどう見られていたのか、どう思われていたのか。この疑問点を基礎として日本の歴史をたどりながら現代の日本までをまとめた講義内容となります。この科目を履修された留学生は「日本」や「日本文化」、それも昔(江戸時代末期から明治時代を経て)現在、すなわち皆さんが見ている・生活している日本とどう違うのか、変わっていないのかなどについて理解できるようになれば幸いです。 プログラムは基本的には座学タイプとなります。履修生の意見をまとめ1回は外に出ることを検討いたします。	【認定基準】 15回の講義の内、12回は出席すること。しかし、経営情報学部の規定は10回出席すれば単位を修得することができます。それでも結構ですが、コメント文(リアクション・ペーパー)を5回提出していただきます。よって、10回出席していたとしてもコメント文が少ない場合は不可となることもございますので、注意してください。 講義中の態度で減点することもあります。 授業で外にでることも検討しますので、遠慮せずに申し出てください。但し、交通費はは各自の負担になりますので、その点を覚えておいてください。	安田 震一	2	【対象】 1～3年次の留学生 【募集人数】 35～45名程度	参加したい学生は、プログラム初回実施日である2025年9月23日(火)5限に、101教室に必ず来ること。 なお、過年度に「日本理解」を修得済みの学生は参加できませんのでご承知おきください。